

〔生馬問〕^二河豚魚本草綱目無毒と有時珍の食物本草には大毒有と見へたり、此魚さはめて氣有るものあり、又毒のなきもの有、故に世上其説まちく也、若此毒にあたる時は、藥物の解しがたきなり、近代薩州太守入國の時、西海にて小舟一艘御座船を呼はり、漕よする、何事やらんと猶豫の間、ほどなく御座船に近付、御船を見かけて願ひ奉る也、砂糖を下し賜はりなば、衆人の命たすかり候、御慈悲を以て頂戴仕度旨ねがひける、其子細を尋させ賜へば、河豚魚の毒にあたり、九死一生に候、今少し時さりなば、一人も活する事を不得、砂糖だに候へば、みなく命たすかり申由願ふ、此事太守にも聞しめされ、人の命を救ふに於ては、砂糖を賜はりなん、猶其實否を見届參るべき由被仰付、彼小舟に御近臣を添らる、急漕出し、彼が所に至り見れば、衆人惱亂して其言の如し、拵右の砂糖を白湯に^{カキサガ}探し用るに、暫くの間に、ことぐく快然を覺て御高恩を謝しける、其妙なる事太守へ申上けると也、此事を尾州にても試たる人有しが、尤妙に彼毒を解したりと也、玄ばらく爰に玄るして後人に備ふ。

河豚は喰合の毒甚だ多し、又藥物と敵す、此魚を食ふ人は、一日の中藥を服す可らず、猥に他物を食べからず、腹中の脾を西施乳といふ、是は西施が美にして國を亂を、此魚の味美にして毒あるに比するなるべし鈍の字を正とす。

〔老の長咄〕京橋邊に名を得し彫工師あり、その隣家にてや、師走の煤はらひし、振賣の鰻を買ひて、其儘庖丁させるを、彫工師見てあれば、此鰻にたまさかありけるて、ふとなんいへるむし、鰻につきしをば見つけ、何ともいはず、かしこの肴屋へはしりて、鰻をつくらせもちて、煤はきし家に至り、今求られし鰻を我に給はり候へ、かはりにはこれをもて、けふのいはひに遣はれよとさしおき、鰻をもち歸り、少し空地に穴を掘つゝ、かの鰻を埋め、土をよくならし、よろこびなせしとかや、能も心を遣ひけり、